

中国仏教史の基本的人物を主だった人

過去七仏(かこしちぶつ)とは釈迦仏までに(釈迦を含めて)登場した7人の仏陀をいう。古い順から

1. **毘婆尸仏**(びばしぶつ) 2、**尸棄仏**(しきぶつ)光相城に生れる。クシャトリア出身 3、**毘舍浮仏**(びしゃふぶつ)無喩城に生れる。クシャトリア出身 4、**俱留孫仏**(くるそんぶつ)バラモン出身。姓は迦葉、5、**俱那含牟尼仏**(くながんむにぶつ)バラモン出身で、姓を迦葉及び婆羅隴といった。6、**迦葉仏**(かしょうぶつ)バラモン出身。姓は同じく迦葉。7、**釈迦仏**

釈迦仏

紀元前 463 年誕生 383 年入滅 紀元前250年頃にアショーカ王により建立された塔・柱が発見された、遺跡の表面にサンスクリット語やギリシャ語で刻まれた事の実見により、釈迦誕生の地ルンビニであることが明らかになった。

五比丘

- 1、阿若・憍陳如 (あにや・きょうちんによ) 2、阿説示 (あせつじ、アッサジ) 3、摩訶摩男(まかまなん) 4、婆提梨迦 (ばだいらか) 5、婆敷 (ばふ)『釈迦の護衛で有りのちに釈迦の初転法輪により悟りを開く』

十代弟子

- 1、舍利弗 (しゃりほつ) 智慧第一 2、摩訶目犍連 (まかもつけんれん) 盆踊りは、目連尊者の餓鬼道に堕ちた亡母への供養 3、摩訶迦葉 (まかかしょう) 頭陀第一といわれ、衣食住にとらわれず、清貧の修行を行った。4、須菩提 (しゅぼだい) 解空第一。また無諍第一、被供養第一とも称される。小屋に屋根を張ったら雨が降った。5、富楼那 (ふるな) 弁舌 (べんぜつ) にすぐれていたとされる。6、迦旃延 (かせんねん) 論議第一と称せられる。仏や舍利弗、目連の滅後、教団の中心人物 7、阿那律 (あなりつ) 天眼第一。釈迦の従弟。失明 8、優波離 (うぱり、うはり) 持律第一と称せられた。釈迦教団における規律は彼によって設けられた 9、羅睺羅 (らごら) 釈迦の実子 10、阿難 (あなん) 釈迦に女人の出家を認めさせた。釈迦が死ぬまで 25 年間常に近侍し、身の回りの世話をした。「多聞第一」

紀元前 268 年～232 年アショーカ王

西暦

65 年頃 来中 竺法蘭(じくほうらん)白馬寺、中国に初めて仏教を伝えたといわれる伝説上の僧。《二十四章経を翻訳した》

68 年頃 来中 迦葉摩騰(かしょうまとう) 白馬寺 《二十四章経を翻訳した》

148 年～ 安世高 (あん せいこう)・中国で初めて仏教の経典を翻訳

149 年～ 支婁迦讖 (しるかせん) 初めて大乘経典を漢訳した。

150～250 頃 龍樹 (龍猛) 真宗・真言密教開祖

四代訳人 鳩摩羅什・真谛・玄奘三蔵・不空金剛 (三蔵)

310 頃～400 頃 天親菩薩七高層の二祖 『浄土論』では浄土三部経を論ずる。

344 年 - 413 鳩摩羅什 (くまらじゅう)

355 年 - 434 道生 (どうしょう) 維摩経

382～532-1 達磨大師 (だるま) 海のシルクロードで広州の華林寺

476～542 曇鸞(どんらん)大師 七高層の三祖 玄中寺に入る

487～593 慧可(えか)二祖 禅宗達磨は断った(雪中断臂)
 499～569 真谛(しんだい) 四代訳人インド
 515～577 慧思(えし) 天台宗三祖 聖徳太子は慧思の生まれ変わり。
 538～597 智顛(ちぎ) 智者大師 天台宗 4 祖
 562～645 道綽七高層の四祖(どうしゃく)禅師
 574～622 聖徳太子
 574 年～? 善信尼(ぜんしんに) 日本で正式な戒律を受けた尼僧
 580 頃～650 頃 小野妹子(おののいもこ) 聖徳太子
 601～675 弘忍(こうにん)中国禅宗の 五祖 慧能に托鉢を渡した。
 602 年 - 664 玄奘三蔵 法相宗の開祖 (鳩摩羅什と二代訳人)
 613～681 善導七高層の五祖 道綽が師
 629～700 道昭(どうしょう) 玄奘三蔵が師 最初の火葬
 638～713 慧能・寺の米つき男 中国禅宗(南宗)の第六祖
 660～749 年頃 栄叡(ようえい) 鑑真と帰中 5 度目の時死亡
 668～749 行基(ぎょうき) 東大寺建立の実質上の責任者「行基図」
 685～762 玄宗皇帝 在位 712～756 年
 688～763 鑑真 律宗の開祖
 701～756 聖武天皇(しょうむ てんのう) 鑑真の時代
 702～760 道璿(どうせん) 鑑真の前日本来る 最澄の師 北宗系の禅で第 7 祖
 704～760 菩提僊那(ぼだいせんな) 鑑真の前に道璿と仏哲と共に 東大寺開眼識の導師
 705～774 不空金剛(三蔵)(ふくうこんごう) 真言密教四祖 四代訳人
 710～770 年頃 普照(ふしょう) 710 不明～玄朗(げんろう) 743 年 普照、栄叡、玄法、戒融(かいゆう)
 唐に渡って玄法も帰国していない。
 754 年頃 思託(したく) 鑑真和上と同行
 754 不明～ 祥彦(しょうげん)遣唐使・第五次海南島に行く時死亡
 754 不明～ 忍基(にんき) 鑑真和上座像の製作者
 759～824 靈仙(りょうせん)日本の三蔵法師・憲宗
 767～822 最澄(さいちょう)入唐八家
 774～835 空海(3) 金剛峯寺(こんごうぶじ)
 1133～1212 法然 七高層の七祖
 1141～1215 栄西 曹洞宗の開祖 臨済禅を伝えた 明全・道元 茶道
 1173～1236 親鸞
 1200～1253 道元 曹洞宗の開祖 2 永平寺
 1415～1499 蓮如

鳩摩羅什(くまらじゅう)、350 年 - 409 年、一説に 344 年 - 413 年とも)は、中国六朝時代の訳経僧である。
 略称は羅什(らじゅう)または什(じゅう)。玄奘と共に二大訳聖と言われる。また、真谛と不空金剛を
 含めて四大訳経家とも呼ばれる。三論宗・成実宗の基礎を築く。

- ・ 350 年 インド出身の鳩摩炎を父に、亀茲国王の妹のジーヴァカを母として亀茲国に生まれる。
- ・ 56 年 母と共に出家。
- ・ 360 年代 原始経典や阿毘達磨仏教を学ぶ。
- ・ 369 年 受具し、須利耶蘇摩と出会って大乘に転向。主に中観派の論書を研究。

- ・ 384年 亀茲(キジ)国を攻略した後涼の呂光の捕虜となるも、軍師的位置にあつて度々呂光を助ける。
- ・ 以降18年、呂光・呂纂の下、涼州で生活。
- ・ 401年 後秦の姚興に迎えられて長安に移転。
- ・ 402年 姚興の意向で女性を受け入れて(女犯)破戒し、還俗させられる。以降、サンスクリット經典の漢訳に従事。
- ・ 409年 逝去。

臨終の直前に「我が所伝(訳した經典)が無謬ならば(間違いが無ければ)焚身ののちに舌焦爛せず」と言ったが、まさに外国の方法に随い火葬したところ、薪滅し姿形なくして、ただ舌だけが焼け残ったといわれる(『高僧伝』巻2)

訳出した經典 主なもの。

- ・ 『坐禪三昧經』3巻
- ・ 『仏説阿彌陀經』1巻
- ・ 『摩訶般若波羅蜜經』27巻(30巻)
- ・ 『妙法蓮華經』8巻
- ・ 『維摩經』3巻
- ・ 『大智度論』100巻
- ・ 『中論』4巻

一部の經典において、大胆な創作や意識の疑いが指摘されるものの、彼の翻訳によって後代の仏教界に与えた影響は計り知れない。なお、唐の玄奘三蔵による訳經を「新訳」(しんやく)と呼び、鳩摩羅什から新訳までの訳經を「旧訳」(くやく)それ以前を古訳と呼ぶ。

西暦350頃~409年。「羅什」とも略称される。中国の南北朝時代初期に仏教經典を訳した僧。インドの貴族の血を引く父と、亀茲(キジ)国の王族の母との間に生れた。7歳のとき母とともに出家した。はじめ原始經典や阿毘達磨仏教を学んだが、大乘に転向した。主に、中觀派の諸論書を研究した。384年、亀茲(キジ)国を攻略した呂光の捕虜となり、以後18年間で涼州での生活を余儀なくされた。のち、401年に後秦の姚興(ヨウコウ)に迎えられて長安に入った。以来、10年足らずの間に精力的に經論の翻訳を行うとともに、多くの門弟を育てた。東アジアの仏教は、鳩摩羅什によって基本的に性格づけられ方向づけられたといつてよい。門弟は三千余人が一部に上つたという。

日本仏教最大の影響力

鳩摩羅什三蔵法師は、西暦409年に亡くなって、1600年になります。日本の仏教にとって、玄奘三蔵法師よりも鳩摩羅什三蔵法師のほうが絶大な影響を与えたと私は考えております。それにもかかわらず、鳩摩羅什三蔵法師のことはあまり知られない。

ぜひ日本中の人たちに鳩摩羅什三蔵法師のことを知っていただきたい。

羅什にゆかり深い草堂寺を訪れ、住職の出迎えと案内で、鳩摩羅什三蔵法師の舍利を納めた舍利塔にお参りをいたしました。

文化大革命のとき、草堂寺の諸堂宇はことごとく破壊されましたが、鳩摩羅什の舍利塔と小堂だけは辛うじて守られて残りました。高さ三メートルほどの舍利塔はすべて玉(ぎよく)で造形されております。千数百年の風雪に耐えた上、信仰上の理由で参拝者が手のひらでなでてさわって鳩摩羅什をしのんだため、玉の彫刻はすり減つておりました。

草堂寺の伽藍は、現在日本の法華經を信仰する人たちがお金を出して復元されつつあります。

玄奘三蔵の名は、『西遊記』などを通じて日本にも熟知されております。しかし、鳩摩羅什三蔵法師の数奇な運命を通じて漢訳された「法華經」「阿彌陀經」「般若經」「唯摩經」「大乘論」などの訳經がなければ、聖徳太子の『三經義疏』も、『十七条憲法』も存在し得なかつたであろうし、天台、禪、日蓮、浄土諸宗の今日的な繁栄もなかつたと考えら

れるわけでありませう。浄土諸宗で用いられる「阿弥陀経」に出てくる「極楽国土」の用語も、龍樹の中観思想を見事に表現した「色即是空、空即是色」の経文も、「南無妙法蓮華経」の唱題も、存在し得なかったのであります。

「煩惱即菩提」「悪人救済」の思想も鳩摩羅什の深い、大乘空観の悟りと苦悩に満ちた人生経験の中からうまれたものといえます。彼は単なる仏教経典の翻訳家であるにとどまらず、偉大なる思想家、哲学者であったのです。

羅什の数奇な運命

鳩摩羅什は AC 三五〇年、シルクロードのオアシス都市国家、亀茲(きじ)国の王族の一人として生まれました。父は鳩摩炎、インドのとある国の大臣の息子で、聡明にして節度ある人。

亀茲(キジ)国王は、鳩摩炎が地位を捨て出家したことを聞いて、国師として王宮に迎えます。国師というのは、その国のすべての人が師匠として教えを聞くべき人です。

母は耆婆(きば)。亀茲国王の妹さんで、炎が亀茲(きじ/きゅうじ)国を訪れたとき二十歳を過ぎたばかりでありました。

彼女は賢く明敏で、一度見聞きしたものはそのまま暗記できる才能があり、その上、身体に赤いアザがあり、そのアザをもつ女性は必ず賢い子供を生むという言い伝えでした。

耆婆の美しさは他と比べようもなく、近隣の国の王妃にと、乞う数があまたでしたが、耆婆は鳩摩炎を一目見るや、たちまちとりこになってしまったことは『三蔵記集』に記載。鳩摩炎は、王命によって還俗させられ、耆婆の願いがかなって結婚。鳩摩羅什を身ごもったのです。

亀茲国というのは、地理からいえば、シルクロード、天山山脈の南側を東西にのびる、天山南路の中核のオアシス国家です。

天山山脈からの雪どけの水で農業は豊かで、近くの山からは鉱物資源が採掘され、シルクロードの交易で栄えた裕福なオアシス都市国家。

国王は白氏(ハクシ)と称しました。タジク語を話すインド・ヨーロッパ語族で、目が深く、鼻が高く、色白の白人種です。

インド・ヨーロッパ語族は二回にわたって民族移動をする。

第一回は今から五千年前、カスピ海を西のほうへ行くと黒海があり、その黒海の周辺に居住したが、一部の人たちがシベリアを経てアルタイ山脈のふもとに居を構えた。

第二回は四千年ほど前。インドやヨーロッパに移動し、南シベリアにも移動しました。この第二回の移動で、千年前に移動してアルタイ山脈の山麓に居住していたインド・ヨーロッパ語族の先住民は、その勢いに押されて南下し、タクラマカン砂漠のオアシスに移住して、後の樓蘭(ろらん)に安住の地を得ます。

亀茲国の先祖は、第二回の民族移動で、天山南路を東進して、今のクチャにオアシス都市を形成し、繁栄したと考えられます。こうした中で亀茲国の王宮は三重の城壁に囲まれ、宮殿の壮麗さはまるで神の神殿のごとくまばゆかったと伝える。それゆえに、その富と地の利を得ようとする他国の圧力は繰り返し襲い、特に東方の漢がここまで攻めてきて、拠点をつくる。北方の騎馬民族とのせめぎ合いの場。お互いに取り合う。取り合うといっても滅亡させるわけではなくて、いわゆる亀茲国が生み出す豊かな富を奪い合う。

インドへ・修業の旅

さて、鳩摩羅什の出家、修学であります。356年、七歳のときに母の耆婆の勧めで出家し沙弥(しゃみ)となり、母親の耆婆も同時に比丘尼となり、出家得度をしようとする。

お父さんはインドのお坊さんで亀茲国の国師に迎えられたにもかかわらず、王の命令で還俗させられて、結婚させられた、父は妻耆婆の出家に絶対反対した。母は、七日間絶食して出家を許してくれなければ死んで…というようなハントを実行しました。仕方なく父が許した。仏教に熱意のある母耆婆の影響を受けて、鳩摩羅什は、一緒に出家した。

358年、鳩摩羅什が九歳のとき、母とともにパミール高原越え大変困難な旅へ出ます。インドのカシミールに赴き、バンズダッタというカシミールの高僧に師事し、上座仏教をきわめ、留学三年、外道との対論に勝利した羅什の名は、一躍、高まる。

紀元前一世紀ごろに起った**大乘仏教運動**は、**竜樹**(AC 180年から248年)と、その弟**提婆**(だいば)によって、ほぼ大成されていましたが、まだ**亀茲国**には伝えられず、**カシミール**の中心教学とはなっていない。

羅什 12 歳のとき、この**カシミール**を後にし、**亀茲国**への帰途**パミール**山中の**北山**(ぼくざん)で、一人の僧が彼の顔を見て、母**耆婆**に予言した。「いつもこの子を守ってあげなさい。もし、三十五歳までに**破戒**しなかったならば、正に大いに**仏法**を起し、無数の人々を度する、**優婆堀多**(うばくた)となる。もし全まっとうせねば、ただ単にああ、賢いお坊さんだんで終わる」と。

大乘仏教への回心

その後、**カシュガル**に至って一年滞在します。羅什は、説法の暇を見て**外道**の教書を学び、天文、星算、陰陽をすべて極めつくし、文学、詩歌等の学問も習得します。

時に**沙車**(ヤルカンド)出身の二人の王子が**カシュガル**にいました。出家して**沙門**となり、人々に、**大乘仏教**を伝えていました。ここでようやく**大乘仏教**との出遇いが出てきます。

鳩摩羅什は、弟の方の**須利耶蘇摩**(しりやそま)に会い、**大乘**の教えを聞きました。ところが**亀茲国**や**カシミール**で修学した**阿含経**(あこんきょう)を中心とする**上座仏教**とは相いれないもの、これは**上座仏教**の「有(う)」の教えから、**大乘**の**般若空観**への転換であり、過去の自分の全否定につながるために、大変な苦悶があった、しかし彼は、最終的には**大乘仏教**への回心を果す。

鳩摩羅什はそのことをなげいて言いました。「我昔、**小乗**を学ぶこと、人、金を知らずして**純銅**をもって妙とするが如し。」鳩摩羅什のこの地での**大乘**への転向がなければ、**中国**仏教や**日本**仏教の今日はなかった。

さて、鳩摩羅什は**亀茲国**へ帰るに当たり、**温宿**(アクス)で一人の道士に出会います。その道士は、「論じて我に勝たば、首を切りてこれに謝せん」と議論を挑んだ。

その道士を鳩摩羅什は論破して、**大乘**仏教に帰依させます。羅什の名声は**パミール**の東から**黄河**の外、すなわち**中国**まで広がったと伝えられる。

亀茲国王の**白純**は羅什を**アクス**まで出迎えます。370 年、鳩摩羅什は二十歳のときに**卑摩羅叉**(ひまらしゃ)を戒師として、**王宮**で受戒し、『**十誦律**』を学び、ここで初めて正式な僧侶になった。

その後、鳩摩羅什の母**耆婆**は**亀茲国王**の**白純**に「汝の国、滅衰す。我、それを去る」と告げて去る。母は**亀茲国**を去るに当たって、羅什に、「鳩摩羅什、あなたしか**中国**に本当の**大乘**の教えを伝える人はいない。しかしそれはあなた自身にとっては何の利益もない。あなたはどうしますか」と、聞く、鳩摩羅什は答えます。「自分がいろいろ鍋で焚かれるような、そんな苦しみにも遭ったとしても悔いはない。この**大乘**の教えを**東方**の国々に伝え、人々の心を洗わせて悟りに至らせるということができれば」と。母は**インド**に去り、鳩摩羅什は**亀茲国**の寺院にとどまって、修学と**大乘**の布教に専念する。

五胡十六国と仏教

四世紀の**中国**は**五胡十六国**の時代。異民族が十六の国を建て、**漢**民族を支配し、**河北**、**黄河**の北側を占領した、**漢**民族の王たちは、本来**儒教**や**道教**を重んじ、異国の宗教である**仏教**を取り入れることに消極的であり、異民族である**五胡十六国**時代の**霸王**たちは、**漢**文化に対するこだわりはさほどなく、**仏教**の受容に前向きな傾向。

その中で**前秦**という国が興り第三代に**苻堅**(ふけん)の王が出現しました。この**苻堅**という人が非常に重要なのです。彼は**五胡十六国**時代の**河北**統一をほぼなし遂げ、また、**仏教**の攝取に熱心で**朝鮮**に初めて**伝道僧**を派遣したのも彼です。だから、**仏教**が**朝鮮**を経て**日本**に渡ったのは、この人の力が大です。

苻堅は**中国**仏教界の第一人者である**釈道安**の推挙(すいきよ)で鳩摩羅什を迎え、名声はすでに**中国**にも及んでいた、道安も鳩摩羅什から直接教えを聞きたいと思っていた、使者を**亀茲国**に送って、鳩摩羅什をぜひ**中国**に招きたいと要請した、**亀茲国**の**国王****白純**は断る、382年9月、**呂光**将軍と七万の兵を与えて**亀茲国**への遠征を実行する。**苻堅**の次に出てくる**姚興**(ようこう)王が、彼らは、**仏教**を本当に自分自身の救いの道として求めた、この**五胡十六国**の時代、凄惨な殺戮の時代、**苻堅**も**姚興**も**仏教**こそ自分の罪深さ、心のむなしさを救ってくれる教えであるということに思い至った、そして、本当に真剣に鳩摩羅什を招いて**仏教**の真髓を聞きたいと思った。

それで将軍**呂光**を七万の軍隊とともに**亀茲国**に派遣して、鳩摩羅什を渡すように説得する、**白純**王はこれを拒否。

全面对決の中、呂光の奇襲によりあえなく落城し、白純王は殺され、鳩摩羅什は捕虜となって虜囚の辱めを受けます。それが『梁・高僧伝』に書いてある。「光ついに亀茲を破る。純を殺す。光すでに什（羅什のこと）を獲るも、いまだその知量を量らず。」

西域の要衝である亀茲国を占領することによって、西域の交易の利益を得るという目的もあった鳩摩羅什を得ることが、一番大きな目的であったと書いてある。

呂光は亀茲の中でも特別美しい王女を鳩摩羅什に与えて、一室に二人を閉じ込め女犯の罪により破戒させる、ある書物は、このとき羅什が何日たっても王女に手を触れない。呂光は王女を呼び出して、「おまえ、何とか鳩摩羅什を誘惑しなさい」と命令する、何遍試みてもそれが成功しない。ある時、王女が部屋に戻ってシクシク泣く。「なぜ泣くんだ」と鳩摩羅什が聞くと、「三日以内にあなたが私を妻にしてくれなかったら、私は殺されてしまいます」と。それで鳩摩羅什は苦渋の選択を迫られて、ついに王女を妻にして破戒をしたという記述があります。

苻堅没し、呂光 後涼国王に

羅什とおびだしい、財宝を手に入れた呂光は、長安への帰路、クーデターによる主君苻堅王の死を知り、姑臧(こぞう)に後涼(こうりょう)国を建て、自ら王位についた。

呂光にとって羅什は、もう必要ない。なぜなら主君である苻堅王から命ぜられて連れてこいと言われ、その苻堅王が亡くなったから、殺してもいいわけです。ところが軍師や風水師的な才能があったために大事にされた、ただ姑臧在住十六年の鳩摩羅什は、いたずらに神異僧として呂光に仕えていたのではない。

『高僧伝』によれば、僧肇(そうじょう)という僧が長安から鳩摩羅什の高名を慕って姑臧を訪れ、肇は羅什から般若空観の教学を学び、また羅什は、肇から中国古典の学識や教養を得る。この16年間の後涼時代に漢語を完璧に自分のものとし、それまでの苦難の人生経験を仏教の教えに照らして、深く味得し、やがて長安で花を開かせる。

長かった長安への道

苻堅王の死と共に、前秦は亡びますが、やがて後秦国が建ち第二代王の姚興(よう う)が天下を握ると、仏教を求める志がたかく、401年5月、姚興王は羅什を引き渡すように後涼国に要求するが、亀茲国の時と同じで、これを拒絶される。

姚興は六万人の軍隊を後涼に派遣して、後涼国第四代呂隆(ろりゅう)王を討たせ、九月に隆は姚興に降伏し、鳩摩羅什を差し出す。

羅什は長安の都に入る。401年12月20日、鳩摩羅什52歳、姚興は鳩摩羅什に正しい經典の漢訳を期待する。羅什の訳場は、逍遙園(しょうようえん)(現草堂寺)、401年12月から約5年間、406年から長安大寺に移り訳経は三十五巻、二百九十四部の大部にわたる。

訳経は、羅什が口訳(こうえん)をし、続いて旧訳と羅什訳を対比、質疑討論、それを弟子が筆受。訳場が即、講義の場にもなる、これでよしとなれば、羅什が美しい文章に書き直す。

日本に伝わった鳩摩羅什の訳本によって、聖徳太子の三経義疏(さんぎょうぎしょ)が生まれ、十七条憲法も生まれた。

玄奘三蔵は、鳩摩羅什に遅れること二百余年、だから、日本仏教への影響は玄奘三蔵よりも鳩摩羅什の方が大きい、「色即是空 空即是色」の般若経の訳語、それまで中国人に難解であった大乘空観の真髓をわずか八文字であらわしたことは、大乘仏教を深く解了し、空悟の心境を開いた羅什を除いてほかには成し得なかった。

また「阿弥陀経」が描く、阿弥陀仏国の理想世界を「極楽」国土と表現したのは、羅什の苦渋に満ちた人生経験の中からこそ生み出された訳語である。

羅什の遺言

409年8月20日、鳩摩羅什は長安で没する、享年六十歳。死に当たって彼は 私はよそ者(外国人)であったけれども、どういう因縁であったか、經典の翻訳に当ることになり、三百余巻を訳した。どうかその本旨を極めて、間違わないようにして欲しい。願わくば、訳した經典を広くひろめて後世に伝えるように。私が翻訳し、大乘仏教の真髓を皆さんに伝えたところに誤りがなかったならば、死んだ後、身はたきぎで焼かれるわけだが、舌だけは焼かれないで形をとどめるであろう。」という言葉を残します。彼の言葉通り、遺体は灰葬されましたが、舌だけ

は灰にならなかったと伝えられる。

鳩摩羅什亡き後、後秦の国力は次第に衰え、姚興も死し、国も417年に滅び、鳩摩羅什が願ったとおり、訳出した仏典は広く東アジア全域に伝播し、日本における諸宗派の根本経典として、今に至るも多くの人々を救済し続けている。まもなく、羅什没後1600年の記念すべき年です、私どもはこれを機会に彼の業績をたたえ、恩に謝すべきです。

羅什大乘仏教への回心

北山を去った羅什はカシュガルに留まり、仏教以外の声・工・医・因・内の五明等巾広い学問や占術、兵法などの知識を収得しましたが、心の中は満たされませんでした。

時に莎車国(やるかんど)の王子で出家し大乘仏教に通達した須利耶蘇摩(すりやそま)がカシュガルに滞在していました。羅什は彼から大乘仏教の空無の思想を伝えられ、たちまち回心(えしん)して、上座仏教を捨て大乘仏教の修学に没頭していきました。

「今まで大乘仏教を知らずに、上座仏教のみが最上であると思って修行して来たのは、あたかも黄金の輝きの美しさを知らずに、銅の輝きこそが最上であると思って来たのと同じでした。」と羅什は須利耶蘇摩に述懐します。カシュガルを離れて亀茲国へ向かう途中温宿国(あくす)で高名な道士と対論して大乘に帰依させた処へ、亀茲国王の白純が羅什を国師とするためアクスまで足を運んで出迎えに来ました。

故郷亀茲国に帰った羅什は、広く大乘仏教の経典を講義しました。それを聞いた中の一人に阿竭耶末帝(あかつやまてい)という亀茲国の王女が、彼女は深く仏教に帰依し、禅法の奥義にも通じていた。羅什の説く大乘仏教の教えに耳を傾け、羅什の為に大法会を催し、かくして羅什の名声は遠く中国(真丹)にまで知られるところとなった。

20才の時彼は卑摩羅叉(びまらしゃ)を戒師として王宮内で具足戒を受戒し、正式な僧侶となり、具足戒は、既に沙弥であって20才から70才までの心身ともに清浄な者がその受戒の資格をもち卑摩羅叉について十誦律を学び、放光経(槃若経)を王宮の中で発見し、大乘空観を深めていく、諸国の王や貴族、僧達も羅什の講義を聴く為にわざわざ亀茲国に来るほどでした。

ジーダとの別離

時に、幼少の頃から彼を高僧に育てるために付き添ってきた母ジーダは、もはや自分の役目が終わったことを悟り、自身の仏道修行を完成するため、再び天竺へ旅立つことを決意する。

母ジーダは一人天竺へ旅立つにあたって羅什に「あなたは東方の国、中国に大乘仏教を伝える使命をもっています。そのことは、あなた自身にとって何の利益になる訳ではありません。それでもあなたはそうしますか。」と問い、これに対して羅什は「たとえ、いろりの火の上で、鍋で焼かれるような苦しみにあうとしても、この教えを東方の人々に伝え、悟りに至らせることができれば、悔いることはありません。」と答えました。

四世紀の中国は五胡十六国の時代で、戦乱に明け暮れていた。やがてほぼ河北を征した前秦の苻堅王は、仏教を建国の中心にすえるため、既に高名な鳩摩羅什法師を長安に迎えんとしてAC382年に呂光将軍に兵七万を与え、亀茲国の征服にあたらせました。

羅什は白純王に「呂光と戦ってはなりません。服従しなければ国が亡びます。」と進言しましたが、白純王は近隣諸国一の援軍(約七十万)を依頼し、呂光との戦いに挑んだ結果、大敗して殺された。

羅什はとらわれの身となり、数々の虜囚の辱めを受けました。呂光は羅什の権威を貶(おとし)めようとして、亀茲国の王女の一人を同室内に閉じこめて破戒することを迫る。(この時の王女がかつて大法会を催した阿竭耶末帝であった。)

破戒については『出三蔵記集』羅什伝などには、呂光は「羅什の父クマラエンは、僧であったのに先王の王女を妻として、あなたを産ませたではないか。何故かたくなに拒むのか。」と酒を飲ませたり、妻としなければ王女を殺すとまで脅して破戒させたといいます。

呂光将軍は長安への帰路、姑蔵(こぞう)武威(ぶい)で前秦国の滅亡を知り、ここに後涼国を建て、王となります。羅什は、姑蔵に十六年間もの間幽閉され、その間僧肇(そうじょう)などが来て漢文の教養を完璧なまでに習熟します。AC401年5月、後秦の王姚興は羅什を引き渡すように後涼国に使者を出しましたが拒否され、六万の軍で後涼国を

攻め、遂に9月には呂光の子、呂隆王は降伏した。

長安での仏典漢訳

401年12月20日、羅什は王姚興によって、長安に迎えられました。王姚興は羅什に經典の正しい漢文への翻訳を依頼、羅什は長安で35巻294部の仏教經典を漢訳した。

その中に今日の日本仏教の有力な教団が依り処としている『妙法蓮經・阿彌陀經・涅槃經・維摩經・般若經』などの經典が含まれています。

『色即是空・空即是色』の般若經の訳語、それまで中国人には難解であった大乘空觀の真髓をわずか八文字で表したことは、大乘仏教を深く解了し、空悟の心境を開いた羅什を除いてほかには成し得なかった。

また『阿彌陀經』が描く、阿彌陀仏国の理想世界を「極樂国土」と表現したのは、羅什の苦渋に満ちた人生経験の中からこそ生み出された訳語。

409年(一説には413年)8月20日、羅什は長安で没しました。享年60才。(一説には70才)死にあたって彼は「私はよそ者(外国人)であったけれども、どういう因縁であったか、經典の翻訳に当ることになり、三百余巻を訳した。どうかその本旨を極めて、間違わないようにして欲しいのです。願わくば、訳した經典を広くひろめて後世に伝えるように。私が翻訳し、大乘仏教の真髓を皆さんに伝えたところに誤りがなかったならば、死んだ後、身はたきぎで焼かれるわけですが、舌だけは焼かれないで形をとどめるでしょう。」という言葉を残す。彼の言葉通り、遺体は灰葬されましたが、舌だけは灰にならなかった。羅什亡き後、後秦の国力は次第に衰え、姚興も死し、国も417年に滅びた、しかし羅什が願った通り、訳出した仏典は広く東アジア全域に伝播し、日本における諸宗派の根本經典として、今に至るも多くの人々を救済し続けている。

羅什は晩年「天竺へ旅立ちたい。」という言葉もしていました。(慧遠の書簡に記載)生涯の最後に当たって、彼を高僧に育てようと、幼少の時から熱心に仏教教育を施し、自らも一緒にカシミールや西域諸国へ修行の旅に同行し、羅什が一人立ちできたと見届けるや、「中国へ的大乗仏教流布」を託して、一人天竺へ旅立った、母ジータの面影が懐かしく去来したのでしょうか。

龍樹

龍樹(りゅうじゆ)は、インド仏教の僧である。日本では、八宗の祖師と称される。また真言宗では、真言八祖の1人であり、浄土真宗の七高僧の第一祖とされ「龍樹菩薩」・「龍樹大士」と尊称される。密教系の仏教では、「龍猛」(りゅうみょう)と呼ばれることもある。

南インドのビダルバの出身のバラモンと伝えられ、幼い頃から多くの学問に通じた。サータヴァーハナ朝の保護のもと、セイロン・カシミール・ガンダーラ・中国などからの僧侶のために院を設けた。この地(古都ハイデラバードの東70km)は後にナーガールジュナ・コーンダ(丘)と呼ばれる。

大衆部・上座部・上座部系説一切有部、さらには当時はじまった大乘仏教運動を体系化したともいわれる。ことに大乘仏教の基盤となる『般若經』で強調された「空」を、無自性に基礎を置いた「空」であると論じて釈迦の縁起を説明し、後の大乘系仏教全般に決定的影響を与える。このことにより龍樹は「大乘八宗の祖」として仰がれている。

彼の教えは、鳩摩羅什によってシナに伝えられ、三論宗が成立。また、シャーンタラクシタによってチベットに伝えられ、ツォンカパを頂点とするチベット仏教教学の中核となる。8世紀以降のインド密教においても、龍樹を著者とする著された。日本には三論宗が伝来したものの衰退してしまい、この教義を中心に据える特別な流派は存在しない。しかし、大乘仏教のほとんどの宗派において龍樹は重要な存在とみなされ、「八宗の祖」と呼ばれ崇められている。

生涯

インド原典で伝わるナーガールジュナ伝が存在しないため史学的に厳密な生涯は不詳であるが、鳩摩羅什訳と伝えられる『龍樹菩薩伝』などによって生涯の概要を窺い知る事ができる。無論、神秘主義者達による後世のフィクションが多いためそれをそのまま受け取る事は出来ないが、当時の人々が龍樹をどのように伝えていたかを知る上で重要な資料であると考えられている。

龍樹菩薩伝の伝説は以下の通りである。この伝説は学者によっては鳩摩羅什作とも主張されており、真偽のほどは定かではない。(この他にも諸伝が存在する。)

天性の才能に恵まれていた龍樹はその学識をもって有名となった。龍樹は才能豊かな3人の友人を持っていたが、ある日互いに相談し学問の誉れは既に得たからこれからは快樂に尽くそうと決めた。彼らは術師から隱身の秘術を得、それを用以王宮にしばしば入り込んだ。100日あまりの間に宮廷の美人は全て犯され、妊娠する者さえ出てきた。この事態に驚愕した王臣たちは対策を練り砂を門に撒き、その足跡を頼りに彼らを追った衛士により3人の友人は切り殺されてしまった。しかし王の影に身を潜めた龍樹だけは惨殺を免れ、**その時愛欲が苦悩と不幸の原因であることを悟り、もし宮廷から逃走する事が出来たならば出家しようと決心した。**

事実、逃走に成功した龍樹は山上の塔を訪ね受戒出家した。小乗の仏典をわずか90日で読破した龍樹は、更なる經典を求めヒマラヤ山中の老比丘からいくらかの大乗仏典を授けられた。これを学んだ後、彼はインド中を遍歴し仏教、非仏教の者達と対論しこれを打ち破った。龍樹はそこで慢心を起こし、仏教は論理的に完全でないところがあるから仏典の表現の不備な点を推理し、1学派を創立しようと考えた。

しかしマハーナーガ(大龍菩薩)が龍樹の慢心を哀れみ、龍樹を海底の龍宮に連れて行き大乗仏典(『般若經』の何か?)を授けた。龍樹は90日においてこれを読破。深い意味を悟る。

龍樹は龍によって南インドへと返され、国王を教化するため自ら応募して將軍となり、瞬く間に軍隊を整備した。王は喜び一体お前は何者なのかと尋ねると自分は全知者であると龍樹は答え、それを証明させるため王は今神々は何をしているのかと尋ねたところ、龍樹は神通力を以って神々と悪魔(阿修羅)の戦闘の様子を王に見せた。これにより王をはじめとして宮廷のバラモン達は仏教に帰依した。

そのころ1人のバラモンがいて、王の反対を押し切り龍樹と討論を開始した。バラモンは術により宮廷に大池を化作し、千葉の蓮華の上に座り、岸にいる龍樹を畜生のようなだと罵った。それに対し龍樹は六牙の白象を化作し池に入り、**鼻でバラモンを地上に投げ出し彼を屈服させた。**

またその時小乗の仏教者がいて常に龍樹を憎んでいた。龍樹は彼にお前は私が長生きするのはうれしくないだろうと尋ねると彼はその通りだと答えた。龍樹はその後静かな部屋に閉じこもり、何日たっても出てこないため弟子が扉を破り部屋に入ると彼は既に息絶えていた。

龍樹の死後100年、南インドの人たちは廟を建て龍樹を仏陀と同じように崇めていたという。

龍樹の空観

この「空」の理論の大成は龍樹の『中論』などの著作によって果たされた。(なお、伝統的に龍樹の著作とされるもののうち『中論(頌)』以外のほとんどは、近代仏教学では龍樹の真作か疑わしいと見られている。)

龍樹は、存在という現象も含めて、あらゆる現象はそれぞれの因果関係の上に成り立っていることを論証している。この因果関係を釈迦は「縁起」として説明している。

さらに、因果関係によって現象が現れているのであるから、それ自身で存在するという「ユニークな実体」(=自性)はないことを明かしている。これによって、縁起によってすべての存在は無自性であり、それによって「空」であると論証しているのである。龍樹の「空」はこれから「無自性空」とも呼ばれる。

しかし、空である現象を人間がどう認識し理解して考えるかについては、直接的に知覚するというだけでなく、人間独自の概念化や言語を使用することが考えられる。龍樹は、人間が空である外界を認識する際に使う「言葉」に関しても、仮に施設したものであるとする。

『大品般若經』の中に以上の内容が含まれているため、龍樹自身がこの經典編纂に携わっていたのではないかという説もある。

この説を、空である法の世界と、言語によって誤って概念的に認識した世界を、それぞれ**真諦**と**俗諦**という二つの真理があるとする。言葉では表現できない釈迦のさとりは真諦であり、言葉で表現された釈迦の言葉を集めた經典などは俗諦であるとする、二諦説と呼ばれる。

さらに、龍樹は「無自性空」から「中」もしくは「中道」もほぼ同義語として扱い、釈迦の中道への回帰を説いている。人

物同一性 錬金術 インドでは仏教の僧であるよりも錬金術師・占星術師として有名で著作伝説があるが、これはこの項で触れている龍樹よりもはるか後代に出現した同名の錬金術師と混同されているためである。

- 『ラサ＝ウパニシャッド』 - ナーガールジュナ作の錬金術の方法が記述されている。
- 『ラサ・ラトナーカラ』、玄奘『大唐西域記』 - ナーガールジュナとサーリヴァハーナ王（引正王）の対話（不老長寿の霊薬など）。
- 『ラサラトナ＝サムッチャヤ』(水銀の宝の集成) - 水銀学の 27 人の学者のなかでナーガールジュナ（とナーガボーディ〈龍智?〉）をあげる。

複数説

仏

教学者の中村元は、ナーガールジュナの同一性を疑う「複数説」を紹介している^[2]。中村によると、以下の6つの人物像がナーガールジュナの名に帰せられている。

1. 『中論』など空思想を展開させた著者
2. 仏教百科事典と呼ぶべき『大智度論』の著者
3. 『華嚴経』十地品の註釈書『十住毘婆沙論』の著者
4. 現実的問題を扱った『宝行王正論』の著者
5. 真言密教の学者（龍猛）
6. 錬金術の学者

この内、中村は 5、6 が、1 と大分色彩を異にしており、別人ではないかと思われると、疑義を呈している。

ウィキソースに『十住毘婆沙論』の原文があります。

ウィキソースに『十住毘婆沙論』「易行品」の原文があります。

- 中論 (madhyamaka kArikA) (正確には頌のみ彼の著作)

説一切有部を代表とする実在論を否定し、世俗においては、すべてのものは実体として認識することはできず、単に言葉によって施説されたものであると説く（「有」または「無」または「有無」または「非有非無」）。勝義においては、それらすべての言語活動すら止滅する（「有」または「無」または「有無」または「非有非無」において、その全ての否定）。この主張を受け継いだのが中観派である。

- 廻諍論 (えじょうろん、vigrahavyAvartanI)
- 空七十論 (zUnyatAsaptati)
- ヴァイダルヤ論
- 十二門論 - 真偽問題が未解決。
- 大智度論 - 真偽問題が未解決。
 - 摩訶般若波羅蜜經 - 『大品般若経』の百巻に及ぶ注釈書である。
- 十住毘婆沙論 - 真偽問題が未解決。大乘菩薩の階位について論述している。ことに「易行品」によって浄土教の往生と成仏が論証されている。
- 宝行王正論(ratnAvalI)